■世界大会関連企画～鈴木鎮一記念館特別イベント

エル・システマの講演 & サロンコンサート

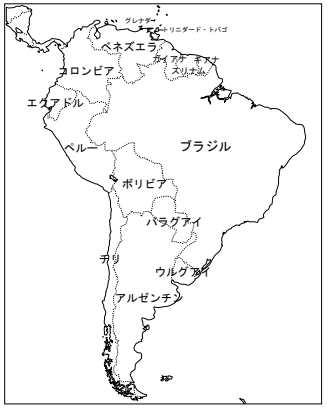
2012年2月26日（日）、鈴木鎮一記念館で講演とコンサートの催しがありました。第一部では、ベネズエラで画期的な成功を得た社会教育システム「エル・システマ」について、本誌168号にも登場された、駐日ベネズエラ・ボリバル共和国特命全権大使の石川成幸大使が講演をされました。また、第二部のコンサートでは、ギターに似た楽器、クアトロの演奏と、石川大使の奥様、コロンえりかさんによる素敵な歌声が披露されました。

El Sistema

講演に先立ち、本会の紹田（たいだ）英哉常務理事から興味深いお話が紹介されました。

――石川大使は日系二世であり、32歳の若さで大使に任命された優秀な外交官であること、奥様のコロンえりかさんの父上がベネズエラ人の作曲家であり、お母様が日本人の歌手であること。そして、鈴木鎮一先生の初期の弟子で、世界的に活躍するヴァイオリニストの小林武史さんが、ベネズエラ政府文化庁からの要請により、国際交流基金の文化使節として、1979年にベネズエラに3ヵ月間滞在し、スズキ・メソードでヴァイオリン教育をされた時、その通訳や身の周りのお世話をされたのが、えりかさんのお母様だったという偶然。小林さんは、現地に行ってみると当初聞いていた条件と、ことごとく違い、困り果てていたところを精神的にも大変助けられたそうです。また、えりかさんの父上は、エル・システマを推進するホセ・アントニオ・アブレウ博士の片腕でした。今や、世界25ヵ国に社会教育システムとして広がったエル・システマの原点がスズキ・メソードであり、その鈴木先生の住居だった記念館で、今日、このような講演とコンサートが開かれる「縁」に、大きな意義を感じる、というお話でした。

それを受けて、石川大使による講演が英語で行なわれました。



ベネズエラについて

今日、こうしてお話をさせていただく機会を得ましたこと、スズキ・メソードの皆様、そして松本市と鈴木鎮一記念館に心から感謝します。

スライドと動画を駆使して講演をされた石川大使。お名前の成幸は、時計のセイコーからというエピソードも披露されました

ベネズエラの観光で有名なものとして、世界最大のエンジェル滝、南米最大のマラカイボ湖、世界一の長さと高さを誇るメリダケーブルカーや南米第3位のオリノコ川などがあります。多様な人種で構成され、60％は混血です。

歴史を振り返りますと、1万2千年前にインディヘナが移住してきました。1498年には、コロンブスが3度目の航海としてスペインから来ました。入り江のある風景を見て、「小さなベネツィア＝ベネズエラ」と名づけたと言われています。その後、スペインによる植民地時代が続き、1811年、独立します。この時にベネズエラとともに、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、パナマを解放したのが、「解放者」と呼ばれるシモン・ボリバルです。

この時期に、ヨーロッパからクラシック音楽が入ってきました。教会の儀式音楽や独立の気運を高める音楽などもさかんに作られ、国歌もこの時に作られました。当時は、30人以上の作曲家、150人以上の音楽家が、首都のカラカスにいたと言われています。インディヘナ、ヨーロピアン、アフリカの人々がベネズエラを構成していました。本日第二部で演奏される「クアトロ」という小さなギターは、多様な人種がもたらす文化の中で生まれた楽器です。

20世紀になって石油が見つかり、工業化が始まりました。1975年にアブレウ博士が設立したのが、エル・システマです。博士は、子どもの頃から演奏活動をしていましたが、すべての子どもたちが音楽に触れられれば、と考えたのが始まりです。現在では、40万人の子どもたちが200以上のオーケストラに所属しています。70％が貧困層からの出身で、一つの大きな家族のようです。2013年には、そのうちの二つ、カラカス・ユースオーケストラが、東京で公演する予定です。

エル・システマによる人間的成長

エル・システマについて、よく聞かれる疑問があります。

①なぜ、成功したのか。

②なぜ、貧困から抜けられたのか。

③なぜ、世界で知られるようになったのか。

これらについて、私たちにも明確な答はなく、今も探しているのが現状です。「音楽が人々にとって何であるか」、このことを松本でお話しする必要はないでしょう。ただ、私たちはオーケストラで弾く、ということは、大きな社会的な責任を持つことだと考えています。オーケストラは、社交的な人生を学ぶ学校です。いろいろな価値観（自己評価、尊敬、我慢、コミットメント、連帯と絆）が学べます。それも家族レベルと、コミュニティのレ

ベルで学ぶことができるのです。そして、オーケストラでは、知的なもの、感情的なものが得られます。それは他人に対してのリーダーシップであり、センスという類いのものです。人間にとって基本的なこととして学べます。

アブレウ博士は、「オーケストラは協調を学ぶ場である」と考えました。子どもたちはオーケストラでそれを学び、貧困家庭に戻り、家族を鼓舞するような働きをするのです。家族の中で大切にするものが何であるかを感じ、それがコミュニティレベルに進みます。数年前、博士は、とある歴史学者に「人類は、今、スピリチュアルな課題に直面している。経済的危機ではなく、精神的危機だ。そこからの回復は音楽、もしくは宗教しかない」とお話しされていました。松本は、その意味でも明るい未来があります。音楽があるからです。

エル・システマは、音楽だけでなく、別のプログラムに行くこともできます。ホワイト・ハンズ・コーラスといって聴力に問題のある人たちのコーラスがあります。手話で歌うコーラスです。障害の有無にかかわらず、すべての子どもたちは、互いに相互作用と同じステージを共有する機会を持っています。「音楽の持つ豊かさで、貧困を助けることができる」とアブレウ博士は言います。

かのマザー・テレサも強調していた言葉がありました。「最も悲しむべきことは、屋根がない、食べ物がないことよりも、誰からも必要とされていないことを知ること」と。オーケストラで弾いたり、コーラスで歌うと、自分の場所を発見します。それが家の中での立場を発見し、コミュニティの中での居場所を発見することにつながるのです。

エル・システマにはＪＩＣＡ（ジャイカ）（国際協力機構）からの寄付があり、ピースボートが中古楽器を日本中から集めたものを送っています。そして、日本で言うところの厚生労働省にあたる部署が動いています。政府の文化活動ではなく、あくまでも社会活動として、活動の原資となる予算は、ベネズエラの関連省庁の予算から捻出されています。

エル・システマにとって、幸せだったことは、1979年に小林武史さんと出逢えたことです。小林さんは、スズキ・メソードで、アブレウ博士たちのこの運動の礎をサポートしてくださいました。大きな感謝で、いっぱいです。私の妻、えりかの父も日本に来て、スズキ・メソードのいろいろなところを訪問したことがありました。スズキ・メソードからは、多大なるインスパイアを受けましたし、勇気づけられもしました。スズキ・メソードをより熱帯的なシステムに変化させたのが、エル・システマと言えるでしょう。本日は、ありがとうございました。

心惹かれる演奏

第二部は、ベネズエラ大使館の文化担当官、モリース・レイナさんによるクアトロの演奏で始まりました。クアトロは、スペイン語で数字の4を意味し、その名の通り、4本弦の弦楽器。ウクレレより大きく、ギターよりも小ぶり。ベネズエラで人気の「バラ色のアマリア」など4曲を演奏されました。クアトロの調べは、草原を吹く風のようです。ラテン音楽の心地よさを感じさせました。

続いて登場したのが、石川大使の妻、えりかさん。ベネズエラで生まれ、聖心女子大学で教育学を学び、英国王立音楽院留学の経歴を持ちます。日本とヨーロッパを中心にオラトリオ分野での高い評価を得ておられます。

この日は、春を待ちわびる日本の歌曲に始まり、えりかさんが20歳の時に訪れた長崎の原爆資料館で知ったエピソードから、父のエリック・コロンさんが作った「被爆のマリアに捧げる讃歌」が披露されました。東日本大震災への追悼も込めての歌声となりました。そして、鈴木先生と同時代の作曲家、ベネズエラのアントニオ・ラウロの作品が2曲。8ヵ月の身重での演奏となったえりかさん。「鈴木先生の『どの子も育つ 親次第』という言葉を聞いて、がんばらなきゃと思いました」と、曲の間に笑いを誘っておられました。最後が、「ヴァレンシアのオレンジ」。軽快なオレンジ売りの歌で、心が浮き立ちます。「みなさん、ぜひヴァレンシアのオレンジを食べに、ベネズエラにいらしてください」と、えりかさんは観光ＰＲも忘れません。とても素敵なコンサートに、全員が酔いしれることができました。

2013年の世界大会で行なわれるシンポジウムでは、このエル・システマも大きな話題として取り上げられます。それだけに、この日、鈴木鎮一記念館で今回の催しができたことは、大きなステップになりました。

甘い歌声と明瞭な発音で、日本の歌曲、ベネズエラの歌曲を歌い分けたえりかさん。短調の悲しみの歌から陽気な物売りの歌まで、歌の持つチカラを感じさせます。ご両親とエル・システマとの関係も印象的です

レイナさんのクアトロの演奏は、独特の複雑なストロークで、ワルツに似たリズム「ホローポ」を刻みながらも、どこか懐かしさを感じさせる雰囲気に満ちていました

鈴木先生の肖像画をバックに、最後は関係者の皆さんで記念撮影をしました。この日、「エル・システマ信州の会」も発足したそうで、メンバーの晴れやかな姿も見られます